ヨーロッパの「一員」か「隣人」か～ウクライナ・アイデンティティの歴史的変遷～

光吉淑江

１、はじめに

2004 年末のウクライナ「オレンジ革命」のとき、大統領選の投票結果でウクライナ東部と西部で大きな地域格差が表れ、それは「東西新冷戦」「東西ウクライナ分裂の危機」などとメディアでも騒がれた。簡単に言うと、西ウクライナ地方はソ連時代の経験が少なく、民族主義が強く、親欧米、東ウクライナはロシア・ソヴィエト時代の長い歴史があり親ロシア的だというものである。しかし詳細に分析してみると、いわゆる「東西分裂説」は短絡的なマスコミか、根拠のないデマや個人攻撃が作り出した幻想だと識者は論じ、オレンジ革命の当事者もウクライナに東西分裂はないと主張した。オレンジ革命はウクライナ人が東西に分かれて対決したのではなく、腐敗した旧政権に対して正義を求める市民の革命であり、市民社会の成熟度を示すものであると冷静な解説がなされた。この解説は正鵠を得ているが、「東西ウクライナ」という見方は本当に現代ウクライナの実態や分析にそぐわない時代遅れのステレオタイプになってしまったのであろうか。

ウクライナは、1991 年に独立するまで一度も自民族による独立国家をもったことがなく、その国境線も 20 世紀の後半にようやく最終画定したことから、その歴史や住民のアイデンティティ形成は時代と地域に応じてきわめて複雑かつ多様なプロセスを経てきた。こうしたウクライナの多様性は、歴史的関係の深いポーランド、ユダヤ、ロシア、クリミア・タタールとの関係から論じたり、東西ウクライナ、東西南北、もしくはさらに細分化したリージョナリズムなど実にさまざまな観点で語られてきた。オレンジ革命の投票結果を反映した最近は、単純すぎる「東西」ではなく、むしろウクライナを西・中央部に対して東南部に分ける方が適切になりつつある。「東西」は最もわかりやすい図式だが、この図式も歴史のなかで国際情勢の変化、外部要因の影響を受けて変容を迫られ、政治の大変動や不安定な社会状況に応じて形を変えて浮上してきた。古くは、東方正教会文化圏と西方ローマ・カトリック文化圏を分かつ「東西」であり、1990 年代は「中欧」概念の復活に乗じてハプスブルグの流れを汲むヨーロッパの「一員」へのアイデンティティに注目が集まり、ＥＵ・ＮＡＴＯの東方拡大や、オレンジ革命を経た現在はＥＵ加盟で「ヨーロッパの一員」を希求するウクライナ・アイデンティティと、「ヨーロッパの隣人（ＥＵの外）でいる」アイデンティティとして議論されることが増えた。

本稿はウクライナ・アイデンティティ理解の出発点である「東西ウクライナ」がどのように形成され変遷してきたのか、その歴史的発展の相違、それぞれのアイデンティティの基となった歴史の記憶が現在のウクライナでどのように受け入れられ、政治問題や歴史論

争を招いてきたのかについて検討する。今一度、この概念が現在のウクライナを語るのに有効か、どのような問題点があるのかを考えてみたい。

２、19 世紀の東西ウクライナ・アイデンティティ

19 世紀のウクライナはロシア帝国かハプスブルグ帝国の支配下に置かれていた。1772-1795 年のポーランド分割により、それまでポーランドの支配下にあったガリツィア東部（現西ウクライナ）地方はオーストリアに入った。キエフ以東のドニエプル左岸地域は 17 世紀にすでにロシア領になっていたが、ポーランド分割によりキエフから西よりのドニエプル右岸もロシア帝国に組み込まれた。同時期、ウクライナ人とルーマニア人が拮抗しながら居住していた北ブコヴィナ地方も弱体化したオスマン・トルコからオーストリアに割譲された。19 世紀後半、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の形成によって、それまで長い間ハンガリー王家の支配をうけていたウクライナ人居住地のザカルパチア地方も、オーストリアの間接統治下におかれた。東西の帝国下のウクライナ人は、それぞれ「小ロシア人」「ルテニア人」と呼ばれていたが、19 世紀後半近代ナショナリズムの時代のなかで、ひとつの「ウクライナ人」という近代的な民族アイデンティティを形成していく。しかし、東西帝国における歴史的経験はかなり異なり、それはウクライナ・アイデンティティの形成にも対照的な影響を及ぼした。そして、今日にいたるまでウクライナの多様性、東西地域格差の根源として議論されているのである。

ポーランド分割によりハプスブルグ帝国領となったが、ガリツィアの地主階級は以前と変わらず圧倒的にポーランド人で、ウクライナ人のほとんどはポーランド地主貴族の下で働く貧しい農民であった。ハプスブルグ帝国は原則として、政治・教育・経済のあらゆる分野でポーランド人優遇政策をとっていたので、ポーランド人とウクライナ人の確執は大きな社会的・民族的対立であり続けた。確かにウクライナ人はウィーン政府のお気に入りではなかったものの、それでもハプスブルグ帝国の「ルテニア人」は、ロシア帝国下の「小ロシア人」が被ったほどには民族文化復興運動に対する壊滅的な打撃や徹底的な弾圧は経験しなかった。ハプスブルグ帝国の中でももっとも産業化の遅れていた最東端の地にありながら、マリア・テレジアやヨーゼフ二世という啓蒙専制君主の下で、リベラルな議会制度や教育改革の恩恵を受けて、ウクライナ民族運動は文化的にも政治的にも大きな発展を遂げることができた。

特にウクライナ人の民族的発展に重要な役割を担ったのがギリシャ・カトリック教会（ユニエイト、ウクライナ・カトリック教会）であった。ローマ・カトリック教会との平等を図ったオーストリア政府によってギリシャ・カトリックは正式に認められ、ウィーンにはウクライナ語の神学校も設立された。妻帯を許されたギリシャ・カトリックの聖職者は、農民主体のウクライナ人のなかでほぼ唯一の教養階層として、信仰のみならず、ウクライナの言語と文化を次世代に伝え、継承していくという民族的役割を果たしたのである。ギ

リシャ・カトリック教会は、ウクライナ農民階級の精神的支柱であるとともに、民族運動、政治運動の担い手を育成する場として機能し、ガリツィアの民族運動に 20 世紀後半まで深くかかわっていくことになる。[1]

ヨーロッパを革命の嵐に巻き込んだ 1848 年革命の際、ウクライナ人の活動は早くも政治的形態をとった。ギリシャ・カトリック教会の聖職者を中心としてリヴィウで「最高ルテニア評議会」が組織され、ウクライナ語の新聞を創刊した。ウィーン体制に対抗するためにギリシャ・カトリック聖職者との連帯を求めていたポーランド人勢力の思惑に反して、ルテニア評議会のウクライナ人は自らの民族的権利を求め、ポーランド人との対決姿勢を鮮明にした。同じく、ウクライナ農民階級も、農民との連帯を求めたポーランド人地主に対する敵意をむき出しにして、一大虐殺事件で報復した。「ガリツィアの虐殺」は、ウクライナ人を単に農民あるいは聖職者としての認識しかなかったポーランド貴族、ひいてはポーランドに同情的だった西ヨーロッパの知識人階級を唖然とさせる。[2]　革命の結果、オーストリア政府は農奴制を廃止し、憲法、代議制、地方自治といった一連の改革を導入した。いずれもポーランド人が優遇されていたものの、この制度改革によってウクライナ人はまがりなりにも一定の民族的権利を獲得し、それはその後のウクライナ民族運動の長期的な発展に大きな貢献をしたのであった。

ガリツィアの民族運動は、1890 年代にさらに高度な政治段階へと到達する。1890 年、作家で革命家のイヴァン・フランコによって設立された「ウクライナ急進党」は、オーストリアで長く呼ばれていた「ルテニア」ではなく「ウクライナ」と自称することによって、東西に分かれて暮らすウクライナ人の統一を初めて掲げたのであった。1907 年の帝国議会下院選挙では男子普通選挙権が導入されて、ウクライナ人にも参政権がもたらされた。しかしながら、このころまでにはポーランド人対ウクライナ人の社会的・民族的対立はますます深刻化していった。ガリツィアのウクライナ・アイデンティティの形成は、「歴史的ポーランドの回復」を求めるポーランドの革命運動と密接に連動しながら発展していくが、最終的にはポーランド人の運動に吸収されることなく、むしろ対決姿勢を鮮明にすることによって「ウクライナ」・アイデンティティを確立していく。そして、それをロシア帝国下の東ウクライナと合同することによって、「歴史的ポーランド」よりも大きな領土と民族になる「大ウクライナ」になる可能性を秘めていたともいう。[3]

ハプスブルグ帝国下のウクライナ・アイデンティティが、ポーランドという他者との強い対抗関係のなかで着実に成長していったのに対して、ロシア帝国下のウクライナ・アイデンティティは、ロシアとの強い結びつきを保持したまま進展する。ロシア帝国の東ウク

---

[1] John-Paul Himka, “The Greek Catholic Church and Nation-Building in Galicia, 1772-1918,” *Harvard Ukrainian Studies*, Vol. 8, Nos. 3-4 (1984): 426-452.
[2] Roman Rosdolsky, *Engels and the Nonhistoric People: The National Question in the Revolution of 1848* (Critique Books, 1986): 56-60.
[3] Iaroslav hrytsak, *Narys istorii Ukrainy: Formuvannia modernoi ukrains'koi natsii: XIX –XX stolittia* (Kyiv: Vydavnytstvo Heneza, 1996).

ライナの民族運動も、民族文化復興運動から政治活動へと段階的に成長していくが、ロシア政府当局は当初、ウクライナ人の活動よりもむしろキエフで社会的、政治的影響力が強く、より反ロシア的で革命志向が強かったポーランド人の動向を警戒していた。したがって、ウクライナ人がスラブ民族の文化やフォークロア収集に興じることは、キエフにおけるポーランド文化の影響を排除し、「スラブ化」ひいては「ロシア化」政策に貢献することになるとして、ウクライナの運動をさほど危険視していなかったのである。失敗に終わったポーランド人の11月蜂起(1831年)後にニコライ一世によって設立されたキエフ大学は、キエフにおけるポーランド文化の影響を排除し、ロシア化政策の拠点として機能するはずであった。しかしキエフ大学は次第にウクライナ民族文化運動の中心地となっていった。

ウクライナの民族的自覚の高まりに脅威を抱き始めたロシア当局は、ウクライナ人にさまざまな制約を与えた。ポーランドの1月蜂起が失敗に終わった1863年、ロシア帝国内相ヴァルーエフはウクライナ語出版の禁止令を発布して、ウクライナの農民大衆がロシア語以外の言葉で教育を受けるのを禁止し、知識人たちが政治的目的をもって農民大衆に近づくのを阻害しようとした。この法令は 1876 年に「エムス法」としてさらに拡大強化され、翻訳、歌謡、文学あらゆる分野の印刷物でウクライナ語の使用が禁じられた。ロシア帝国内ではウクライナ語による活動や出版は、事実上1917年のロシア革命まで不可能となった。ロシア帝国で活動を続けられなくなったウクライナの知識人は、ハプスブルグ帝国下のより自由なガリツィアに活動の場を移すことになる。

西と東に分断されていた「ルテニア人」と「小ロシア人」がひとつの「ウクライナ人」というアイデンティティを形成することができたのは、言語や慣習を同じくする人々の集団を「ウクライナ人」という近代的民族として認識し、それを国境を越えて普及させるべく努めた東西知識人の交流によるところが大きい。その代表例としてウクライナ・コサック神話が東西に分断されていたウクライナの人々を統一する役割を果たしたことがあげられよう。ロシア帝国下の東ウクライナの民族主義的知識人は、16-18世紀、左岸ウクライナに存在したウクライナ・コサック自治国家に対する関心を発展させ、ウクライナ民族の過去の栄光として理想化した。コサック神話は、国民詩人タラス・シェフチェンコの詩を通じて本来コサックとは無縁のガリツィア地方に伝わったのであった。ガリツィアでもコサックは理想化され、ウクライナのナショナル・アイデンティティとして認識されるようになった。シェフチェンコ自身も自らはガリツィアを一度も訪れたことがないにもかかわらず、東西のウクライナ人全体にとって、「ウクライナ」を代表するシンボル的国民詩人、精神的支柱となっていったのであった。

とはいえ、東ウクライナの文化人はウクライナ・アイデンティを育みながらも、ロシアとの強い結びつきを維持しつづけた。19 世紀ウクライナの最大の思想家にして革命家のミハイロ・ドラホマノフは、キエフ大学の教授職を奪われて、スイスに国外追放され、国外からロシア、オーストリア両帝国のウクライナ人の運動を指導し、革命思想に大きな影響を与えた。ウクライナ民族主義思想の泰斗といわれるドラホマノフにしても、ウクライナ

語とロシア語両方で執筆をおこない、彼の政治綱領の多くはウクライナ民族主義であると同時に民主的社会の確立、社会革命を求めるものであった。歴史家ミコラ・コストマーロフやパンテレイモン・クリシら、ロシア帝国のウクライナ知識人たちはポーランド・アイデンティティへの同化姿勢は一切みせなかったが、ロシアへの断固たる決別姿勢もみせず、スラブ全体、ロシア全体といった枠組みにおいてウクライナの特質を強調するという議論展開をおこなっていた。

ロシア帝国下でも、ウクライナ人による初の政党が世紀転換期に登場した。しかし 1905 年革命から第一次世界大戦までの短期間の合法政党時代には大衆の支持基盤を確立することはできなかった。その主な原因は、やはりエムス法によるウクライナ運動への徹底的な抑圧政策にあった。ハプスブルグ帝国下でほぼ自由なウクライナ語出版と教育を享受していた状況に比べて、ロシア帝国のウクライナ農民大衆は、自分たちがロシアともポーランドとも異なる言語や宗教、生活習慣をもつ存在であるという認識はあったものの、それを「ウクライナ人」という近代民族のアイデンティティとして強く認識する段階には達していなかったのである。西のウクライナ人がポーランド人に抱いたような敵対感情を、東のウクライナ人はロシア人に対して持っていなかった。

さらに重要なのは、ウクライナの労働者階級には強力なロシア化が進行していたことである。1861 年の農奴解放に引き続き、南部ウクライナでは産業の近代化が始まり、ドンバス、クリボイログで炭鉱や冶金産業が成長していた。南東部工業地域はロシア語やロシア文化に同化した労働者階級を生み出し、彼らは政治的にもロシア政党への親近感を深めていった。ロシア語話者の社会主義知識人は工場で非合法の集会を組織して、20 世紀初めにはこれら工場労働者を大規模ストライキに動員することに成功していた。

こうしたウクライナ・アイデンティの形成にみられた東西の違いは、1917—1920 年のウクライナ革命の成り行きにも影響を及ぼした。ロシア革命の時代、東のキエフではウクライナ人民共和国が成立し、西のガリツィアでは西ウクライナ人民共和国が成立し、両国は東西ウクライナの合同を目指して活動する。東の共和国はロシアからの完全な分離独立ではなく、新しい民主ロシアとの連邦制のもとで自治を実現するという方針から出発した。ウクライナ人民共和国の初代大統領は、ウクライナ歴史学の大家ミハイロ・フルシェフスキーであった。1890 年代末リヴィウ大学初のウクライナ史講座の教授に就任して、ロシア史と別個のウクライナ歴史学を体系付けたフルシェフスキーは、革命の時代にキエフで政治家となったが、ウクライナの完全独立には否定的で、ロシアとの連邦関係の樹立に最後まで希望を託していたのである。[4]

一方、西の共和国はハプスブルグ帝国が崩壊すると西ウクライナ人民共和国を宣言して、

---

[4] 拙稿「ウクライナ民族運動とヴォロディミル・ヴィンニチェンコ、1917－1919 年」『ロシア史研究』第 54 号、1994 年、22－39 頁

東のウクライナ共和国と合同することを目指す。彼らには、分割前の「歴史的ポーランド」の復活を夢見るポーランド人と連邦制を築くという発想はない。それどころか、西ウクライナ人民共和国の設立直後から、ガリツィアのウクライナ人の独立を認めないポーランド軍との激しい戦争が始まった。最終的に、西ウクライナ人民共和国はポーランド軍に敗北し、戦間期を通じてポーランドの統治下におかれる。東の共和国もボリシェヴィキ・ロシアに敗北し、独立闘争は挫折した。東西ウクライナは再び、ポーランド、ソ連という二つの国にわかれてしまう。異なる体制、異なる民族政策のもとで東西のウクライナ人のアイデンティティは再び対照的な発展のプロセスを歩むのであった。

３、「中欧」の復活とウクライナ

1980 年代に東西冷戦下のチェコスロヴァキアやハンガリーの反体制知識人・文化人の間で広がった「中欧」概念は、社会主義崩壊後の 1990 年代、再び注目を集めることになった。第一次世界大戦前にハプスブルク帝国のドイツ語文化圏で洗練された文化と伝統、「多民族・多文化」共生の地という「中欧」を軸に、その歴史的アイデンティティと「欧州新秩序」の方向をさぐるべく、知識人や政治家の間で中欧とは何かといった論議がおこなわれた。1990 年代にとりざたされた「中欧」は、政治経済的には、議会制民主主義と資本主義、市場経済、歴史文化的にはカトリックとハプスブルグの歴史と文化を共有して「社会主義東欧」からの脱却をめざすというものであった。ポーランド、ハンガリー、チェコ、スロヴァキアは地域協力の「ヴィシェグラード・グループ」を設立し、ヨーロッパ回帰の流れをつくり、EU 加盟の道筋をつけた。

「中欧概念」を推進するどの国もが、自国は「東西ヨーロッパの架け橋」だと主張しているように、ウクライナも独立以来、自らを「ヨーロッパの一員」と強調し、それを新国家のアイデンティティのひとつとしてきたのである。ウクライナもヨーロッパ文明の一員であり、ウクライナの将来は統合したヨーロッパと共にあると国の内外で主張することによって、ウクライナは「東」「社会主義」「ソヴィエト・ロシアのくびき」から脱却することができるのであろう。ウクライナで「ヨーロッパの一員」であることをもっとも感じさせる場所がかつてのガリツィア＝西ウクライナである。と同時に中欧概念の復活とヨーロッパ回帰の動きが EU 東方拡大に帰結した結果、「ヨーロッパの一員」というアイデンティティが傷つけられ、EU 新加盟国との間の新たな分断を痛感したのも、ハプスブルグの歴史と文化を共有していたガリツィア＝西ウクライナである。しかし 1990 年代以降、西ウクライナでも自らの「ヨーロッパ性」、「中欧性」を主張する試みが少なからず続いているのである。

ソ連崩壊直前の 1990 年３月にウクライナで初の複数政党選挙が行われ、ウクライナ独立に向けて大きな原動力となった。西ウクライナではリヴィウ、テルノピル、イヴァン・フランキフスクというかつてのガリツィア 3 州では民族主義人民戦線「ルーフ」系列の「民

主ブロック」が圧倒的勝利を手にした。[5]　これを受けて「ルーフ」の指導者のビチェスラフ・チョルノヴィルは、3 州とともに「ガリツィア協会」設立を提起した。これは 1991 年前後のウクライナ各地で登場した分離主義の動きのひとつとして理解でき、共産主義化した東ウクライナに対して西ウクライナ地方の独自性と利益を強く擁護していくという主旨で設立された。とはいえこのアイデアはすぐにソ連崩壊、ウクライナ独立が現実のものになると、ウクライナの独立と統一を確保するためにはこうしたガリツィアの利益擁護は、ガリツィアの地方自治の拡大強化、ひいてはウクライナの地方分権や連邦化を促進し、独立ウクライナ全体の統一を損なうものになりかねないとして、ガリツィア協会は、その綱領も活動も停止してしまった。[6]

以来、大きな政治的動きには発展しないものの、西ウクライナの歴史的文化的特殊性を強く主張して、いわばガリツィア・アイデンティティとも呼ばれる潮流は、学術文化の分野では存続してきた。[7]「ガリツィア」や「ハプスブルグ・ガリツィア」をキーワードにした文化人の著作、学術研究はかなりの量にのぼり、ウクライナで最も人気のある詩人でリヴィウ出身のアンドルホーヴィッチや編集者タラス・ヴォズニャクらは、雑誌『Ji』（Ji はウクライナ語に特徴的なアルファベット文字を意味する）やリヴィウの地方新聞『ポストゥプ（進歩)』などで定期的に西ウクライナの独自性を語り、ガリツィア地域主義やウクライナの連邦化を論じている。[8]

歴史を遡れば、ウクライナは、ロシアが 17 世紀にピョートル大帝の急激な「西欧化」もなかったし、される必要はなかった。なぜならウクライナはすでにヨーロッパの一部であったからだ。その後のもっとも大切な時期がハプスブルグ時代である。ガリツィアの中心都市リヴィウは、中世末期に建設されて以来、政治、文化、宗教、商業の中心地として栄え、ハプスブルグ時代にはオペラ座や荘厳な議事堂が建築されて、「東のウィーン」ともいうべき発展を遂げてきた。当時の建築物や都市景観は今に残され、オーケストラや美術館、博物館を有する文化都市は、1998 年にユネスコの世界遺産に登録された。リヴィウを通じてウクライナは、ヨーロッパ文化を摂取してきたのである。ウクライナにとってのヨーロッパは、西ヨーロッパではなく、ボヘミア、ハンガリー、ポーランドなどドイツ文化圏の中央ヨーロッパであった。フランス、イギリスとの交流関係はむしろ断片的で、西ウクライナの親ヨーロッパ性は、「中央ヨーロッパ・アイデンティティ」なのである。[9]

---

[5]　中井和夫『ウクライナ・ナショナリズム、独立のディレンマ』　東京大学出版会、1998 年、121-128 頁。

[6] Taras Kuzio, “Autonomist and Separatist Sentiment Grows in Western Ukraine,” *The Ukrainian Weekly,* August 4, 2002.

[7] Yaroslav Hrytsak, “Historical Memory and Regional Identity among Galicia’s Ukrainians,” in *Galicia: A Multicultured Land,* eds Chris Hann and Paul Robert Magocsi, University pf Toronto Press, 2005): 185-209.

[8] *Ji : nezalezhnyi kul’torolohichnyi chasopys,* no. 23 (Lviv, 2001).

[9] Ivan L. Rudnytsky, “Ukraine Between East and West,” *Essays in Modern Ukrainian*

西ウクライナとヨーロッパを結びつけるもう一つ重要なファクターは、ギリシャ・カトリック教会の存在である。2001 年には前ローマ教皇ヨハネ・パウロ 2 世が訪問し、2007 年春には現教皇ベネディクト 16 世がリヴィウのギリシャ・カトリック大学の改修工事に 10 万ユーロの寄付を表明するなど、ローマとの特別の結びつきを誇っているのである。[10]

2000 年 8 月末には、ハプスブルグ帝国の啓蒙君主フランツ・ヨーゼフ 1 世の生誕 170 周年を祝う記念行事がリヴィウで行われた。イベントの内容はリヴィウのオペラ劇場で皇帝についての演劇、学者と政治家を交えたシンポジウムなどで、地元のラジオ局では終日「中央ヨーロッパの音楽」が流れたという。こうした動きは「古きよき時代」への懐古趣味であり、社会的・政治的に勢力を持つような状況が到来するとも思えない。にもかかわらずこうした風潮が出てくることの背景には、今のウクライナ社会の状態に対する失望があるだろう。おりしも 8 月 24 日のウクライナ独立記念日と機を一にしたヨーゼフ 1 世の記念行事の開催は、現政権への痛烈な皮肉を含んでいたとも指摘されている。[11]

初代ウクライナ大統領のクラフチューク政権（1991－94）は、反体制民族運動「ルーフ」と協調路線をとり、政権にとりこむことで独立を達成した。しかし民族主義勢力への歩み寄りはロシアとの対決姿勢を強め、民主化と市場経済改革は行き詰まりをみせ、国民の生活水準は低下した。独立への熱狂は徐々に冷め、国民はさまざまな反応で新国家への失望を示した。東部の年配者はソ連時代を懐かしみ、西部の民族主義者は今の独立ウクライナは彼らが夢見た真のウクライナの独立ではないと苛立ちを感じた。

クチマ政権（1994－2004）は、外交的にはロシア・アメリカ双方に協調路線をとってきたものの、その政治は権威主義体制とよばれる民主主義とは異なる体制を築いた。[12] ハプスブルグ時代に議会制の伝統を分かち合った中欧諸国は、市場経済と民主主義を着実に定着させてヨーロッパ回帰を邁進しているのに対し、ウクライナの政治は腐敗と汚職にまみれていた。クチマ政権は強権政治をおこない、オリガーキーたちは政治への不正なアクセスによって、不透明な民営化を通して財産を築き、一般市民の生活水準はやはり改善しなかった。西ウクライナのアイデンティティからすれば、現在のウクライナはソヴィエト時代以来のロシア化した、クチマ大統領をはじめロシア語を話す政治家や官僚に操られ、再びウクライナは植民地化されていると写ったのである。2000 年に入るとクチマ大統領は、反政府的な雑誌記者暗殺事件への直接的な関与を疑われて、大規模な市民の抗議集会を招くという末期的な症状を露呈していた。

History (Harvard University Press, 1987): 1-9.

[10] "Pope Gives 100,000 Euros for Ukrainian Catholic U "Student Town" *Religious Information Service of Ukraine,* May 24, 2007. http://www.risu.org.ua/eng/news/article;15858/

[11] Andriy Zayarnyuk, "On the Frontiers of Central Europe: Ukrainian Galicia at the Turn of the Millennium," *Space of Identity,* Vol. 1. http://www.spacesofidentity.net/

[12] 藤森信吉「ウクライナ、政権交代としてのオレンジ革命」北海道大学スラブ研究センター研究報告集『スラブ・ユーラシア学の構築』16、2006 年

特に西ウクライナのヨーロッパ志向のアイデンティティにとって、許し難いクチマ政権の歴史認識は、2004 年のペレヤスラフ協定 350 周年記念行事（1654-2004 年）であった。17 世紀半ば、ウクライナ・コサック団の首領ボフダン・フメリニツキーは、当時ウクライナを支配していたポーランドと戦うために、北方の新興国モスクワ・ロシアと軍事同盟を結んだ。このペレヤスラフ協定は、ウクライナとロシアの「永遠の結合」、「諸民族の友好」の原点として帝政ロシアとソ連時代を通じて長く称えられてきた。ただし正反対の立場に立てば、ペレヤスラフ協定はロシアによるウクライナ支配の第一歩として、常に歴史論争の的となってきた。2002 年 3 月、クチマ大統領はペレヤスラフ協定 350 周年をキエフで祝う大統領令を発布して、学校の作文コンクールや展覧会、各種文化活動、学術会議、シンポジウムの開催などが計画された。[13] おりしも、2004 年 10 月の大統領選挙（オレンジ革命）を控え、ロシア政府への歩み寄りだとウクライナ市民は感じとり、知識人・文化人はあたかも歴史に逆行するかの流れに強い憤りを抱き、抗議活動や署名運動をおこなった。ペレヤスラフ協定記念の日と制定された 2004 年 1 月 18 日にはプーチン大統領がキエフに招かれ、記念コンサートが開催された。両大統領はウクライナとロシアの友好、政治、歴史発展にとってペレヤスラフ協定の重要性を再認識して、両国のパートナーシップを強調した。劇場の外では市民の抗議デモが続いていた。そのわずか数ヵ月後の 2004 年 5 月には中欧 4 カ国がＥＵに加盟してしまった。いままで自由に往来していた隣国とのあいだには、新たな国境の壁がつくられ、かつて歴史文化を構成してきた共存地域が分断されはじめた。ヨーロッパの一員になれずに取り残されたウクライナでは、大統領選挙戦がはじまり、親ロシアの候補者が有力であった。この一連の動きは、悲願の独立を達成しヨーロッパの一員を目指すべきウクライナの歴史の歩みに逆行するかのように見えたであろう。ウクライナの疲弊する政治経済への不満に加え、クチマ政権の歴史認識も人々の不安をあおり、オレンジ革命の社会的背景の一側面を構成したといえよう。

確かに、中央ヨーロッパ概念の復活といわれるが、1990 年代にあっては、ロシア・バルカンとの差異化という優越意識に結びつき、これらの国はＥＵとＮＡＴＯ加盟に血道をあげることになった。その EU も多文化を標榜しながら、実情はキリスト教文化を根強く残し、移民などに対して排他的・不寛容な側面を持ち続けていることが既に指摘されてきている。西ウクライナの中央ヨーロッパ・アイデンティティも、プラスの面にばかり目をむけてマイナスの側面に目を閉ざしている「幻想」の部分が多い。ハプスブルグ時代の西ウクライナ（ガリツィア）は、ハプスブルグ帝国全体からみると、もっとも産業化の遅れた最貧の農業地帯で、民族文化の発展にも恵まれていたとは決していえない。多民族の文化が共生していたというのは幻想で、ユダヤ人、ウクライナ人、ポーランド人などが不寛容なナショナル・アイデンティティをはぐくみ、しのぎを削っていたのもこの地域である。この同じ時期に、民族調和とは程遠い民族対立の舞台でもあった。そうしたマイナス部分は差し

[13] Stephen Velychenko, “1654 and All That in 2004,” *Journal of Ukrainian Studies,* Vol. 30, No. 1, 2005.

引かれて、民主主義、リベラリズム、文化の発展、多民族調和社会といったプラスの部分が強調されているのである。内部に排他性を潜めるEUに加盟を果たした中欧諸国も、その「中欧概念」には排他性が潜んでいる。そしてその中欧に遅れまいと、中欧概念を主張する西ウクライナのアイデンティティも、東ウクライナやソ連・ロシアとの違いを強調することで自らの排他性と不寛容を強めているように感じられるのである。

いづれにしても、古きよきハプスブルグを懐かしむ過去への回帰だけでは、ウクライナ東西分裂説などとよばれるものに発展はしないだろう。現代ウクライナを東西に分けるより深刻な歴史問題は、第2次世界大戦の記憶をめぐる東西の違いなのである。

４、第２次世界大戦をめぐる記憶

2007年4月末、旧ソ連エストニアの首都タリンで、第2次世界大戦のソ連兵士の記念碑が撤去され、ロシア系住民の激しい抗議を招き、警官隊と衝突して死傷者を出すという事件が起きた。エストニアの約 3 割を占めるロシア系住民にとってこの記念碑は、ナチス・ドイツに対するソ連勝利の象徴だが、大半のエストニア人にとってソ連の勝利は、戦間期エストニアが享受していた独立を喪失してソ連邦の 1 共和国になったこと、すなわちソ連による占領の開始にほかならない。ソ連が崩壊して独立を回復した現在、ソ連の勝利やその記念碑を讃え続けることはできないのである。一方ロシア系住民、そしてロシア政府は、エストニア政府の記念像撤去はファシズムと戦って命を落とした兵士の思いを犠牲にするものだと激しい非難をよせて、両国関係は極度に緊張した。旧ソ連各国の多くでいまだ重要な祝日である第 2 次世界大戦戦勝記念日５月 9 日を間近に控えて起こったこの事件は、国際的にも大きく取り上げられ、戦争をめぐる歴史認識の違いを改めて考えさせられることになった。ウクライナの「歴史認識の違い」は、エストニア同様、いやそれ以上に複雑なのである。

第１次世界大戦後、中東欧ではいくつかの独立国家が誕生したが、ウクライナはそれを達成することができなかった。西ウクライナの大部分は再興したポーランドの支配におかれた。独立を達成できなかったウクライナ人は、ポーランド政府の厳しい少数民族迫害政策に遭うなかで、社会的・民族的不満を募らせていった。ハプスブルグ時代のガリツィア州議会を転用した荘厳なリヴィウ大学には、ポーランド人学生が優先的に入学を許可され、ウクライナ学生のための授業や教授陣は極めて不十分であった。19 世紀末にフルシェフスキーのウクライナ史講座が開かれ、ウクライナ学術文化の拠点として栄えたリヴィウ大学の民族的役割は大幅に後退した。学問を受ける機会を奪われたウクライナの若者は、非合法の学習サークルに集い、地下活動に参加していった。そこから、ウクライナ民族独立を至上目的とする極度に愛国主義的で急進主義のウクライナ民族主義のイデオロギーが成長していったのである。これは大戦間期のヨーロッパで、民主主義体制が崩壊して、ファシズムの影響をうけて右翼急進主義と民族主義が結びついて、ファシズム的団体や半独裁・

権威主義国家が各国で誕生していく政治的・思想的潮流を背景としていた。

1929 年にウィーンでウクライナ民族主義者組織（ＯＵＮ）が創設された。OUN はウクライナ人による国家建設を綱領として、それを阻害する勢力であるポーランドやソ連の要人や政治家、外交官を襲い、ポーランド警察当局と対決姿勢を強めていった。1939 年９月、独ソ不可侵条約の秘密議定書の取り決めに従い、ソ連はドイツと共に、ポーランドを東西に分割し、西ウクライナをソ連のウクライナ共和国に併合した。長い間東西に分断されていたウクライナの地は、スターリンの下で、ようやく統一を果たしたと歓呼の声が紙面を飾った。[14] カジミエシ公の名を冠していたリヴィウ大学は、ウクライナ作家イヴァン・フランコの名を冠してウクライナの大学へと形を変えた。しかしソヴィエト社会主義化政策は、過酷な農業集団化やウクライナ民族主義者に対する逮捕と強制収容所送りを伴い、西ウクライナの人々が待ち望んでいた形でのウクライナの独立ではなかった。[15] ポーランド人に代わる新たな支配者であるソ連、ロシア人への敵意と憎悪はますます強固なものとなり、民族運動はソ連を最大の敵とみなして急進化していく。こうした流れのなかで、ウクライナ国家建設に立ちはだかるソヴィエトとポーランドという強大な敵に対抗するには、徹底的な反ソ・反ボリシェヴィキ思想を掲げるナチス・ドイツとの協力が選択肢として浮上したのであった。ＯＵＮは 1940 年に分裂するが、主流となったステパン・バンデラ派は、ドイツ軍部と交渉の結果、ウクライナ人部隊「ナハチガル」と「ローランド」を創設し、約 700 名がドイツで軍事訓練を受けた。

ドイツとの協力によってウクライナ国家を建設するというＯＵＮの目標は、1941 年 6 月に現実のものとなる。1941 年 6 月 22 日独ソ戦が始まり、ソ連の西ウクライナ支配はわずか 1 年 10 ヶ月で終わる。撤退したソ連軍に代わってリヴィウに入城したドイツ軍の傍らには、ナハチガル部隊があり指揮官ヤロスラフ・ステツコ（1912－1986）は、6 月 30 日にウクライナ共和国の独立宣言をおこなった。リヴィウのウクライナ市民はドイツ軍を歓迎し、ギリシャ・カトリック教会はこれを支持し、祝福を与えた。OUN はドイツ軍への感謝の念を述べ、ウクライナ独立を阻むソヴィエト政権、ロシア人、そしてボリシェヴィキに協力するユダヤ人に対する怒りをあらわにし、彼らへの容赦なき戦いを宣言した。そして実際、多くのユダヤ人が殺害されたのであった。[16]

もとよりナチス・ドイツにウクライナ独立を認めるつもりはなく、早くも 7 月 12 日にはステツコをはじめ、主要メンバーはゲシュタポに逮捕され、ベルリンに連行され収容所送りになる。その後 1944 年末までナチス・ドイツ軍はウクライナのほぼ全域を占領して、ド

---

[14] たとえば、*Kolhospnytsia Ukrainy,* Nos. 17-18, 1939.

[15] Jan Gross, *Revolution from Abroad: Soviet Conquest of Poland's Western Ukraine and Western Belorussia* (Princeton University Press, 1988).

[16] 野村真理「失われた世界へ、東ガリツィアの戦間期からホロコーストまで」 大津留厚編『中央ヨーロッパの可能性』 昭和堂、2006 年

イツの東方生存圏としてウクライナから穀物原料を徴発して、かつ「オストアルバイター」として約 200 万人をウクライナからドイツへ強制連行していった。

再度地下に潜行したＯＵＮは、1942-43 年にかけて北西部ヴォルイニアから開始した「ウクライナ蜂起軍（ＵＰＡ）」を吸収する形で再編成した。OUN-UPA は、ウクライナの完全独立を目指してウクライナ東部へ勢力を拡大し、ドイツ軍・ソ連軍に対するパルチザン戦を開始した。ドイツ軍が 1944 年後半にウクライナから撤退すると、この地をすべて再統合したソ連軍を相手に 1950 年代半ばまでゲリラ戦を続けた。OUN-UPA の勢力は最大時で 2 万―4 万、あるいは 10 万ともいわれる。最終的にソ連の掃討作戦によって、OUN-UPA が壊滅すると、兵士や家族は逮捕、強制移住、収容所送りとなった。もしくは大戦終結時にソ連側の追跡を逃れて西側占領地域の難民キャンプに身を寄せ、その後アメリカ大陸に移住していった。戦後ソ連では、西ウクライナの民族宗教であったギリシャ・カトリック教会は解散されウクライナ正教会に合併された。ウクライナ民族主義について語ることはタブーとなり、この独立闘争の記憶は人々の心の内に秘められた。あるいは亡命先の北米のウクライナ系の移民社会で語り継がれていったのである。

第 2 次大戦におけるウクライナ人の経験、対独戦争協力は、ウクライナ史研究のもっとも難しいテーマの一つであるとともに、現代ウクライナにおける政治課題でもある。[17] 戦争協力問題はもともと、ウクライナ本国よりも、戦争協力の主な舞台であった西ウクライナからの約 15 万の戦後移民の定住先、アメリカとカナダのウクライナ移民社会において議論されてきた。1980 年代にはナチス戦犯追求、戦争責任裁判と市民権剥奪問題との関連で、この問題は、学問的研究の枠にとどまらず北米のユダヤ社会とウクライナ社会を巻き込んだ非難の応酬と対決に発展したこともしばしばであった。[18]

ＯＵＮ－ＵＰＡの流れを汲む団体、それに同情的な北米のウクライナ系移民社会、弁護士、研究者たちは、ウクライナ民族主義者とドイツが協力関係にあったことは否定しないものの、戦争協力の実態と本質、特にユダヤ人虐殺への関与について深く追究することを避ける傾向にあった。ナチスとの協力は、国家を持たないウクライナ人にとって止むを得ない選択で、ソ連という最大の敵を倒すための「より少ない・まだましな悪（lesser evil）」で、「敵の敵は友」というほどのものでさえなかったという。ドイツとの協力関係は短期間のうちに破綻して、OUN-UPA はその活動方針を対ドイツ・パルチザン抵抗闘争に転換していった。ドイツ軍司令部との協力関係でさえも一様ではなく、ドイツ軍はウクライナ民族主義の活動を各地で制限し、ゲシュタポを派遣してウクライナ民族主義者を逮捕・銃殺していった。約３万５千人のユダヤ人虐殺の場として有名なキエフのバービー・ヤール渓谷では、ウクライナ民族主義者も多く殺されたのであった。ウクライナ人部隊は、米英連合国

---

[17] Wilfried Jilge, “The Politics of History and the Second World War in Post-Communist Ukraine,” *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas,* Vol 54 No.1, 2006.

[18] Yury Boshyk, ed., *Ukraine during World War II: History and its Aftermath* (Canadian Institute of Ukrainian Studies, 1986).

との戦線ではなく、ウクライナの敵であるソ連との戦線にのみ投入されるよう確約をとっており、無条件にドイツの傀儡として枢軸国陣営に与していたわけではないことを主張してきた。そうすることで、「ウクライナ民族主義者＝ナチス協力者」のイメージの払拭につとめてきたのであった。ペレストロイカ以降、ソ連・ウクライナで歴史の見直しが始まると、過去の記憶を蘇らせ、OUN-UPA のメンバーの名誉回復を求める動きは本国にも伝わり活発になっていった。ウクライナ民族主義者はウクライナ独立のために闘ったのであり、祖国の英雄として名誉回復すべきだという議論が登場した。ステパン・バンデラは、ドイツと協力したのではない、真のウクライナの独立の闘士であるから、正当に評価されるべきとする研究も登場しはじめた。[19]

確かにＯＵＮ－ＵＰＡは祖国ウクライナの独立のために戦った闘志である。しかし彼らの思想と政治綱領は、明らかにイタリア・ファシズムの影響を強くうけた反民主主義的内容を特徴としている。ウクライナ独立至上主義、民族の栄光のためには、敵に対する無慈悲、容赦なき戦いを主張している。ウクライナ人の地を支配しようとするポーランド人、ソ連体制を支持するロシア人、ユダヤ人、ウクライナ人は敵であり、制裁の対象である。そしてウクライナの独立国家では独裁的軍事指導者・総統制が布かれるとされた。このような綱領をもつ OUN-UPA はウクライナ西部では圧倒的な支持を受けていたが、東部ではそうはいかなかった。1943 年以降は、OUN-UPA は東ウクライナにも浸透し、支持基盤を拡大していったので、OUN-ＵＰＡは、ウクライナ全体の運動であったという主張がある。確かにUPAは､OUNの民族主義者ではなく､農民の自発的なドイツ軍への抵抗運動から始まった。ドイツ軍がウクライナ占領地域を東へ進めるのにあわせて、合体したＯＵＮ－ＵＰＡ部隊も遠征部隊を編成してドイツ軍と共に東へ向かい、勢力拡大をはかった。時にはドンバスまで遠征してパンフレットを配布、各種文化活動を行い、現地でウクライナ独立の支持者を募り､東ウクライナ人をＵＰＡに入隊させていった｡ＵＰＡのなかでＯＵＮ出身者は 1943 年で 40％程度だが、指導部はやはりＯＵＮバンデラ派が掌握していた。しかも、ＯＵＮ－ＵＰＡ部隊は東ウクライナへの支持層拡大に苦労していた｡OUN-UPA は東ウクライナの住民にはウクライナ民族意識が希薄で、ロシア人を敵とみなしていないことに落胆することもあった。逆に東ウクライナの住民は、OUN-UPA の極端なウクライナ至上主義、排他的な反ユダヤ・反ロシアの思想に同調することはできなかったのである。[20]　東ウクライナにも 1930 年代のスターリン大粛清や大飢饉によって、ソ連体制に対する不満や反ソ感情がなかったとはいえないが、ドイツ軍との協力には至っていない。東ウクライナでの影響力拡大に苦労した OUN-UPA は後に、その人種主義的・排他的な民族感情を控えた綱領を政策して、東

---

[19] David R. Marples, “Stepan Bandera: The resurrection of a Ukrainian national hero” *Europe-Asia Studies*, Vol. 58, No. 4, 2006.

[20] Karel C. Berkhoff, *Harvest of Despair: Life and Death in Ukraine Under Nazi Rule* (Harvard University Press, 2004)

ウクライナの人々に受容されるよう方針転換を行うこともあった。

さらに言えば、OUN-UPA がすでに対独抵抗運動へ方針転換した時期になっても、ドイツ軍とウクライナ民族主義者の間には新たな協力が誕生していたのである。SS ガリツィア部隊（第 14SS 武装擲弾兵師団ガリツィーエン、後にウクライナ第 1 と名称変更）は、ナチス武装親衛隊の外国人部隊として創設された。1943 年 4 月にＳＳガリツィアへの兵士募集が始まり、西ウクライナを中心に約 8 万人もの志願者が殺到し、1 万 3 千が登用されたが、そのなかにはＯＵＮやＵＰＡのメンバーもいた。バンデラ派ら、民族主義指導者たちもこれを認可した。[21]　ウクライナ人兵士の多くは、SS をナチス・ドイツのために戦うというより、将来のウクライナ独立国家の基盤となる軍隊であると理解して、ウクライナ人独自の軍隊を持つことに誇りを感じていた。ＳＳ部隊はソ連軍との戦闘に従事することを約束され、1944 年のブロディの戦いでソ連軍に敗北した。その後はガリツィアＳＳからの脱走兵がＵＰＡに参加した。1945 年春ナチスの降伏時に、約 18000 人となっており、連合国軍に投降した。その後メンバーの多くは連合国の捕虜収容所を経由して北米に移住していった。

ＯＵＮ―ＵＰＡの戦友会は、戦後アメリカ、カナダで活動していたが、ウクライナ独立後は、本国に拠点を移し、学術団体・出版社の活動が、外国ＮＧＯの支援をうけて活発になる。ギリシャ・カトリック教会が再開してカトリック神学校が設立されると、北米で活動していたギリシャ・カトリック教会から聖職者が派遣され、援助の手が差し伸べられた。19 世紀後半から北米大陸への移民経験をもつ西ウクライナは、今も北米との結びつきが強く、国際交流、故郷訪問、各種 NGO による 交流もさかんである。民族主義勢力、そしてそれに同情的な西ウクライナの人々にとって、エストニアと同様、第 2 次大戦のソ連の勝利を手放しでたたえるわけにはいかないのである。しかしこの思いは、第 2 次大戦をソ連兵として戦った東部南部ウクライナ住民にとって、理解されるものではない。約２千万に上るソ連の大戦犠牲者の半数は、国土のほとんどをドイツに占領されたウクライナ人だともいわれているのだ。

2001 年の国勢調査によれば、ウクライナの総人口約 4850 万人のうち、自己申告にもとづけば、ウクライナ人は約 78％(3700 万人)、ロシア人は約 17％(830 万人)であった。ウクライナ語を母語とする住民は 67.5％、ロシア語を母語とする住民は 29.6％であるが、地域別にみれば、東部諸州のロシア語母語者は８割に達する。東部のドネツク州などではロシア語母語者の数は、むしろ増加傾向にある。[22]　2004 年の大統領選のキャンペーンでは、東部に支持基盤のある親ロシア派のヤヌコヴィッチ候補がロシア語に第 2 の公用語の地位を与えることを公約に掲げて物議をまきおこした。言語問題は、東西分裂現象のひとつとして大いに議論され、「ウクライナ人ならウクライナ語を話すべき」としてロシア語系住民の

---

[21] Michael O. Logusz, *Galicia Division: The Waffen-SS 14th Grenadier Division 1943-1945* (Schiffer Military History, 1997).

[22] Yaroslav Hrytsak, “Tales of Two Cities,” 2006 年 11 月 25 日ウクライナ研究会（東京大学）での配布資料より

多さを嘆く声はよく聞こえるが、言語もそれまでの長い歴史経験に基づいて形成されてきたアイデンティティの一つの表れなのである。確かに、国勢調査が明らかにしているように「ウクライナ人か、ロシア人か」と二者択一で問われるとウクライナ人が 7 割、ロシア人が 3 割という結果になり、ウクライナ人とウクライナ語が優勢だが、「ウクライナ人でもありロシア人でもある」という二重（多元的）アイデンティティを肯定する第三の選択肢が付け加えられた意識調査が行われると、東部では二重アイデンティティを選択するものが半数近くに上り、一方、西部に二重アイデンティの選択者はほとんどいないという結果がでた。[23] 東ウクライナのアイデンティティは、確かに「親ロシア」ではあるが、それは「親ウクライナであり親ロシア」という二重アイデンティティということを改めて認識すべきであろう。これに対して西ウクライナのアイデンティティは、他者の排除によって形成されてきた単一アイデンティティである。

19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて、ウクライナ人という民族アイデンティティの形成においては、西ウクライナに遅れをとっていた東ウクライナのウクライナ・アイデンティティは、ロシア革命・ウクライナ革命の時代を経て、かなり確かなものになっていった。ウクライナ民族独立の動きを封じ、支配者となったソヴィエト・ロシアもウクライナ革命運動の高まりの事実を無視することはできず、ソヴィエト連邦の中にウクライナ共和国をつくる必要に迫られたのであった。そして 1920 年代、ソヴィエト政権への支持を促進するため「ウクライナ化政策」が取られ、ウクライナ語の普及、共産党や政府の指導部へのウクライナ人登用、ウクライナの民族文化と歴史の振興政策が採用された。しかしスターリンの時代になると、この政策は転換され、ウクライナ化を推進した文化人や党指導者の多くが粛清される。1933 年の農業集団化によるウクライナ飢饉を頂点として、スターリン体制はウクライナ民族とその文化を容赦なく破壊したといわれてきた。しかしながら、このような大後退の時代にあっても、それは直ちに全面的逆転にはつながらずソ連指導部の民族政策には慎重に連続性の要素が残ったという指摘も近年なされている。大ロシア主義が高揚したといわれる第 2 次大戦、戦後になっても、ソ連のウクライナ民族政策は、モスクワからの一方的な押し付けではなく、ロシア中央政府とウクライナ地方当局、地方エリート、民族主義的知識人、そして一般市民との間にはさまざまな対立と駆け引き、交渉、コミュニケーションの回路があった。ソヴィエト政権は、体制への支持だけでなく市民の無意識の抵抗、無関心を含めた地方当局との交渉を経て、ウクライナ政策を計画実行してソヴィエト体制をつくりあげた。キエフの文化人や党エリート官僚は、ウクライナの人々にソヴィエト・ウクライナ・アイデンティティを形成してきたのである。[24] そして東ウクライナの人々も、ウクライナとロシアの共通の歴史認識、ロシア語とウクライナ語のバイリ

---

[23] Myroslav Popovych, “Problem of National Self-Identification in Ukraine,” *Action Ukraine Report,* No. 575, October 2, 2005.

[24] Serhy Yekelchyk, *Stalin's Empire of Memory：Russian-Ukrainian Relations in the Soviet Historical Imagination,* (Toronto：University of Toronto Press, 2004)

ンガル、ロシア人とウクライナ人の婚姻、ロシア・ウクライナ間の移住、冷戦時代にあっては西側資本主義への敵愾心醸成といった、ソ連の民族政策によってロシア人ではない「ウクライナ人」というアイデンティティを自らのものとしてきたのである。[25] 大戦後、フルシチョフ、ブレジネフとウクライナと関係の深い政治家はウクライナ共和国でキャリアを積んでモスクワへ出世し、全ソ連の指導者となっていった。ロシア共和国を「長男」とするならば、ウクライナは残り 14 共和国のなかのトップに立つ「次男」として、ソ連第 2 の共和国の地位を自らのものとし、ソ連の指導者と歴史を生み出してきたのである。

2005 年 5 月 9 日、モスクワで開催された第２次世界大戦終了６０周年の記念式典には、日本を含む敗戦国・戦勝国の指導者が集い、過去の対立を解消し、世界平和を誓う盛大な式典となった。オレンジ革命直後のユーシチェンコ大統領は、当初モスクワの式典に参加しないことを表明していたが、あとになって前言を翻す形で急遽モスクワを訪問した。そこでプーチン大統領主催の盛大なパレードに半日だけ参加し、午後にはキエフにとんぼ返りをして地元の記念行事に合流した。ウクライナ民族主義者たちの期待に反して、UPA の名誉回復に関するようなスピーチなどは行わなかった。逆に、モスクワでの盛大な記念式典の直後とあってか、かつての連合国はすでに日本やドイツら敵国との和解を達成したのに、ウクライナでは旧ソ連兵はまだ OUN-UPA の兵士に和解と救済の手をさしだして、赦すことができず、同じ国民同士の対立を終わらせることができていないという悲痛な声明を発した。ナチス収容所を生き延びた元ソ連兵を父にもつユーシチェンコ大統領にとって、東西双方の国民感情に配慮しつつも、OUN-UPA は祖国のために戦ったソ連軍と対等な存在ではなく、「赦されなくてはいけない」存在なのか、とユーシチェンコ政権のこの問題に対する不十分な姿勢が指摘された。[26]

これを受けてか、2 年後の 2007 年 5 月 9 日の大戦記念日の大統領演説は、さらに UPA への歩み寄りを一歩強めたものとなった。大統領はイデオロギーの違いや陣営の違いを乗り越えて、祖国のために戦ったすべての人々の勇気ある行い、祖国への愛と団結力を強調し讃えた。1920-50 年代までの間にウクライナのために闘ったすべての人々に、正当な歴史的評価をする時期がくるべきだと述べ、その「尊敬と感謝の念を受けるに値するウクライナの団結ために戦ったすべての人々」として、かつて「ナハチガル」部隊将校でＵＰＡ総司令官ロマン・シュヘーヴィチに言及した。UPA の名誉回復へ一歩進んだといえよう。そして「私は、わが国民を分断させるようないかなる立場も認めない」と、いまだ解決できていないウクライナ分断の阻止を強調した。

2007 年春のエストニアの事件が起きたとき、ウクライナ東部の大都市ハリコフ市議会で

---

[25] Dominique Arel, “The Orange Revolution: Analysis and Implications of the 2004 Presidential Election in Ukraine,” *Paper at the Third Annual Stasiuk Cambridge Lecture on Contemporary Ukraine*, February 25, 2005.

[26] Mykola Ryabchuk, “Culture of Memory and Politics of Forgetting,” *Krytyka* 1-2, 2006.

は、撤去された記念碑をハリコフに移送してはどうかという意見が提出された。[27] 一方、中東部のポルタヴァ州でも、記念碑墓地に埋葬されている 12 人のソ連兵のうち 2 人はポルタヴァ出身なので、この 2 人をポルタヴァに埋葬しなおそうという意見がでた。[28] ウクライナ最東部の州ルハンスクでは、第 2 次大戦中のソ連の若者による英雄的な対独パルチザン闘争と悲劇的な最期を描いたファジェーエフの歴史小説『若き親衛隊』の再版が州知事によって支持された。これも、ソ連の過去をないがしろにする流れへの抵抗とみてとれるだろう。[29] 5 月 9 日の新聞記事では、ユーシチェンコ大統領演説とともに、72.5% の人が戦勝記念日が大切な祝日と考えているという世論調査の結果が報道された。[30] 西ウクライナの民族主義者の名誉回復を求める動きは、少しづつではあるが着実に進んでいる。それをより確かに、旧ソ連の歴史を強くもつ東ウクライナに認めてもらうには、西ウクライナの人々も、第２次大戦のソ連勝利を大切に思う東ウクライナの歴史感情に配慮し尊重すべきであろう。相手方を弾劾するだけでは和解は行われず、対立は解消しないということがユーシチェンコ大統領の演説からも読み取れるのであった。

５、むすびにかえて

第 2 次世界大戦から 60 余年、ソ連崩壊から 15 年、世代交代が進めば、歴史認識に根ざした東西のアイデンティティもいずれは消滅していくのではないかという予測はいささか楽観的であろう。西からでも東からでも、時として過激なまでの第 2 次大戦記念日廃止論や、OUN-UPA の名誉回復論、あるいは東からのロシア語公用語化待望論は、むしろ若い世代から発せられているのである。こうした状況にあって、ウクライナ語とロシア語が混ざりあった「スルジク」と呼ばれる「ちゃんぽん語」の女装歌手、ヴェルカ・セルデュチカが爆発的な人気を博しているのは、ロシア語かウクライナ語か、親欧米か親ロシアか、どちらかのアイデンティティでなければ許容しない狭量な文化、社会的風潮への反発を、嘲笑

---

[27] "Ukraine Mayor Offers Home to Dismantled Estonian War Memorial," *European Channel,* April 27, 2007.

[28] "Mayor Wants Remains of Poltava residents Buried at Estonia Liberator Monument Brought to Ukraine," *Ukrainian News Agency*, May 9, 2007.

[29] Andrey Kurkov, "Independent Ukraine as a Function of Soviet Inertia," Lecture presented at The 2006 J.B. Rudnyckyj Distinguished Lecture, University of Manitoba, February 23, 2006.
(http://www.umanitoba.ca/libraries/units/archives/grants/rudnyckyj_lecture/lecture_13.html)

[30] "Yuschenko Calling On Ukrainians For Unity On Victory Day" *Ukrainian News,* May 9, 2007, http://www.ukranews.com/eng/article/41859.html

と皮肉まじりに茶化している現象ともみてとれる。[31]

そして最後に注意を喚起したいのは、このような東西の歴史認識の違い、あるいは西ウクライナ・アイデンティティに潜む排他的な民族主義、不寛容を利用するかのような排外主義的愛国主義、最近のウクライナにおける反ユダヤ主義の増加である。わずか 0.2%（約 10 万 3000 人）と、ソ連崩壊以来減少し続けているウクライナのユダヤ人をめぐる状況は近年悪化している。1990 年代を通じて人口の 4 分の 1 ほどが、ユダヤ人との結婚や市民権付与をめぐる問題等で、何らかの反ユダヤ感情を抱き、強くなっていることが明らかにされた。特に西ウクライナで反ユダヤ感情が強いことが指摘されている。[32]

ソ連崩壊後、史料が幅広く公開されるようになり、タブーだったテーマの歴史研究は飛躍的な進展を遂げるようになった。国際会議や学術書の出版が増えたこと自体は歓迎すべきことであろうが、ときには根拠を欠いた分析、偏見、感情論に基づく議論も存在する。こうした議論の一部は偏狭なまでの民族主義的主張、反共産主義と結びついている。スターリンの犯罪、1933 年飢饉、ソ連指導部への非難を、巧妙にユダヤ人の陰謀論へ摩り替えて論じているものもある。「ユダヤ・ボリシェヴィキ神話」の復活ともいわんばかりの根拠のない誹謗や悪意に満ちた中傷は、学術書として出版されていることに眼を覆いたくものもある。[33] 2005 年夏、キエフでシナゴーグから出てきたユダヤ人学生に対する集団暴行事件は、ウクライナで密かに進行している宗教的不寛容の表れかとユダヤ社会を恐怖に陥れた。[34]

19 世紀以来、独立国家をもたなかったウクライナ人の歴史は、民族のアイデンティティを形成し、独立国家をつくる歴史であった。それを達成した現在、今のウクライナは民族のアイデンティティを声高らかに主張する必要はもはやなくなった。今ある国家も民族主義者によって創られたものではなく、ソヴィエト時代の経験を経て成立し、そしてそれは常に多民族で多文化社会であった。21 世紀という時代にあっては民主主義と市場経済を確立し、すべての市民によりよき生活を保障せねばならない。ヨーロッパ、ロシアとの関係を改善強化しつつ、国内改革を実行できる政府を国民はもとめている。東西ウクライナの歴史にもとづくアイデンティティの違いが外交や民主化、市場経済改革に関して影響を及ぼすことはないだろう。しかし文化や言語政策に関しては、歴史を無視した政策、多民族・多文化共存にそぐわない均一的なアイデンティティの性急な押し付けでは、東西の違いを再びきわだたせ、時には政情不安を増大させる勢力を生み出すことになりかねない。多様な価値観を尊重するための寛容な精神と時間が、ウクライナの国民全体に求められている

---

[31] Ilya Khineyko, "The Little Russian: Verka Serduchka," *Current Politics in Ukraine*, May 22, 2007, http://ukraineanalysis.wordpress.com/

[32] Per Rudling, "Organized Anti-Semitism in Contemporary Ukraine: Structure, Influence, and Ideology," *Canadian Slavonic Papers,* Vol.48. Nos. 1-2, 2006: 81-119.

[33] *Komu buv vyhidnyi holodomor?* (Personal, Kyiv: 2003)

[34] "More anti-Semitism," *Kiev Post,* August 31, 2005.

のである。